

# 薩摩半島南部における焼酎製造業の 地誌学的考察

濱 園 奈穂美

鹿児島県の気候風土条件に最も適したものとして、本県では焼酎製造業が主要な在来工業となっている。そこで、本論文は県内でも特に成長著しい薩摩半島南部に着目し、その地域の自然条件、原料及び労働力の需給関係から、地域と焼酎製造業との関連並びに位置づけを明らかにしようとしたものである。

本論は5章から成る。第1章では、焼酎製造業の定義を述べた上で、焼酎製造業にみる鹿児島県の位置を、全国的及び県内分布から概説し、その変遷についても別項を設けて解説した。第2章は、枕崎市の概観及び本市における焼酎製造業の位置づけ、第3章では、薩摩半島南部の自然環境・人文環境について概観した。さらに第4章は本論文の中心をなすもので、自然条件、主原料である甘藷の需給関係、及び焼酎杜氏の存在という3つの地域条件から、薩摩半島南部地域と焼酎製造業との関連をみていった。最後に第5章において、焼酎製造業の問題点並びに展望を述べ、本論文をまとめた。

本論文の要旨は次のとおりである。

高温多湿な南九州では、伝統的に旧式焼酎が製造され、また嗜好されており、「焼酎地域」をなす。なかでも、鹿児島県の芋焼酎はシェアが高い。

鹿児島島の酒造の変遷は、酒造税法による制約がその方向づけをしてきたといえ、また現在のように芋焼酎が圧倒的となったのは、戦後の米不足を契機とするものである。本県では、製造場も多く、その分布は県下一円に大小の酒造場が見られる。小規模な酒造場は、伝統的な地場銘柄をもち、市町村或いは数ヶ町村・郡単位で製造供給されている。また、生産統制がとかれた昭和40年代以降は、製造場がかなり淘汰された。これは、大規模製造場は生産量が増加・県下全域に販路を伸ばし、

小・中規模製造場は共同で「協業組合」を組織するようになったためである。

県内の数多い酒造場の中で、圧倒的なシェアをもち、急成長を続けているのは、枕崎市にある薩摩酒造である。枕崎市における焼酎製造業の地位は、鯉節製造業に次ぐ地場産業として、地域に与える影響も大きい。

ところで、薩摩半島南部における焼酎製造業と地域との関連として、次の3つの地域条件が考えられる。まず、自然条件として高温多湿な気候風土条件と、ミネラル分の多い水が大量に得られることが挙げられる。次に原料需給関係だが、芋焼酎の主原料である甘藷が周辺地域一帯との契約栽培により、多量に得られる。しかも、南薩産の甘藷は、でんぶん質の多い良質なものである。

また、労働力需給関係としては、黒瀬という焼酎杜氏部落が近くに存在する。この黒瀬部落は、地理的悪条件から出稼ぎを余儀なくされ、そのなかで杜氏という有利な職を選び相互扶助的な身内意識の強いものとして杜氏部落が形成された。が、現在、若者の定職傾向、県外流出により後継者難が起っている。

鹿児島県では、現在数社の大規模な酒造会社があり、県全体の焼酎生産量の過半数を生産し、県内及び県外へと広範囲に出荷している。毎年確実にシェアを高めながらも、県内需要の伸び悩み、販売競争の激化、原料甘藷作付面積の減少等の多くの問題を抱えている。

今後の課題として、九州以外の地域への販路拡大や消費者の多様化嗜好に合わせた銘柄選択時代を築くこと等が挙げられるが、国際的な蒸留酒として、今後の焼酎製造業界の発展は期待できるといえよう。